

北欧4カ国における交流・研修の実践報告

「ろう・難聴」学生を対象として―

筑波技術短期大学電子情報学科情報工学専攻¹⁾ 同建築工学科²⁾

新井孝昭¹⁾ 西岡知之¹⁾ 山脇博紀²⁾ 萩田秋雄²⁾

要旨：2004年3月、ろう・難聴学生を対象にして、北欧4カ国（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク）を訪れ、国際交流を目的とした教育・研修プログラムを実践した。北欧へ向けてのこのプログラムは今回で3回目であるが、他大学で学ぶ学生の中にも、このプログラムへの参加を希望する者が現れた。そこには、既に本プログラムに参加して交流を体験した筑波技術短期大学（以下、本学とする）聴覚部学生や、まさに参加を希望している本学聴覚部学生たちによる直接のコミュニケーション（話しかけ）があった。そのような背景を踏まえて、今回のプログラムでは、本学学生を優先しながらも他大学や他地域からの参加希望者を広く認めた。

本プログラムでは、北欧4カ国の聴覚障害者高等教育機関やろう者に関わる諸機関の視察及び、各地のろう者やそのろう者と関わりを持つ聴者との国際的な交流を行ったが、その進行過程においては、本学聴覚部学生と全国から集まったろう・難聴学生及び社会人との間の有意義な交流もあり、現在もそれは続いている。本稿では、この教育・研修プログラムの概要と成果について報告する。

キーワード： 北欧視察 国際交流 教育プログラム バイリンガル教育 ろう教育

1. はじめに

聴覚障害児（者）の育児や教育における手話環境の必要性を明確に打ち出している北欧諸国での国際交流及び研修のプログラムが、2002年3月と2003年3月に本学聴覚部学生を対象に実施された[1]。この2回のプログラムに参加した本学聴覚部学生の総数は、29名、本学卒業生4名であり、聴覚部在籍生（約150名）の約2割の学生が参加したことになる。そして、これら交流・研修プログラムに関する情報は、本学聴覚部学生の友人・知人である他大学で学ぶろう学生や難聴学生へも伝わり、「機会があれば参加したい」という希望が我々に届いていた。

今までの経験から、本プログラムは本学聴覚部学生の国際交流・研修を目的とするプログラムではあるが、本学以外の、それも聴覚障害に関係して積極的な参加動機や意識を持つろう・難聴学生の存在があれば、プログラムに参加した者同士のコミュニケーションを通して、本学学生の参加意識もより高まるのではないかと判断が、企画担当の新井と萩田にはあった。そこで今回（2004年3月）は、試みとして、本プログラムへの参加対象者を本学学生に限定せず、他大学で学ぶろう学生や難聴学生などへも広げて呼びかけることにした。

本稿では、2004年3月の北欧4カ国（フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、デンマーク）への交流・研修プログラムの概要とそれによって得られた成果について論述する。

2. 交流・研修プログラムの概要

本プログラムの呼びかけは、先ず本学聴覚部学生に対して優先的に行い、応募者が一段落してから、ろう者や難聴者が運営しているメーリングリストやホームページを通して募集を行った。今回は、例年に比べて本学学生の応募が少なかったが、学外からの反応は予想を超えたものであった。このような海外交流プログラムを求めているろう者、難聴者、さらには手話やろう教育に関心を持っている聴者の関心が高いことが分かった。

実施期間は、前年と前々年と同様に3月の学年末試験が終了してから卒業式までの間の13日間、2004年3月6日～18日、であった。

2.1 参加者について

参加者の総数は29名。内訳は、本学学生6名、本学卒業生1名、他大学学生8名（筑波大学、群馬大学、日本福祉大学、東京成徳大学、田園調布学園大学）、中学生1名（横浜ろう学校）、社会人5名、手話通訳（音声日本語と日本の手話）者3名、本学教員4名、コミュニケーションサポート兼添乗者1名である。

今回は本学の学生からの応募は少なかったが、学外からの反響が大きかったことは特筆すべきことである。卒業生からの情報提供、ろう者や難聴者の登録が多いメーリングリスト「オープンコミュニケーション」での呼びかけ、ろう者が運営しているネットワークニュース「デフニュース」

や聴覚障害学生が組織してるホームページへの掲載などを通して、全国から問い合わせと参加申し込みが寄せられた。そして、参加申し込みの理由からは、世界各国のろう者との交流と「ろう文化」や「ろう教育」のあり方を視察・研修するということへの興味や関心の高さを検証することができた。その一部を紹介する。

毎年行かれているという海外研修の話を、{筑波技術短期大学聴覚部卒業生の さん}(この部分筆者により加筆)から伺いました。唐突で、失礼かとは思いつつも非常に興味がありまして、詳細を聞きたい旨を さん(この部分筆者により加筆)に申しましたところ、こちらのご連絡先を伺いました。まだ申し込みは可能でしょうか。また、他大学の学生でも参加は可能なのでしょうか。お忙しいところ、大変申し訳ありません。詳細を知りたく連絡申し上げました。よろしくお願い致します。

サークルがきっかけで聴覚障害者問題に興味を持ち始めました。今回の企画をデフニュースのメールマガジンで知り、参加してみたいなあと思いました。北欧4大都市交流旅行企画に興味があって、質問させていただきたく、メールさせていただきました。突然ながら、失礼いたします。デフニュースでこの企画を知りました。私にとって、内容が魅力的で、ぜひとも参加したいと思いました。

高校卒業までずっとろう学校に通っていましたが、愛知県の日本福祉大学に入って二年目になりますが、聴覚障害学生の情報保障がまだまだ不十分な環境です。そこで、他の国の事情はどんなものかと興味を持っていたのでこの企画に参加しようと思いました。海外のろう教育についても前から勉強してみたかったので、この企画を有意義なものにしていきたいと思っています。

筑波技術短期大学の友達、 さん(この部分筆者により加筆)の紹介で北欧への交流研修旅行のことを聞きました。もし行きたいのなら今すぐ相談したほうがいいと言われ、早速メールさせていただきました。私は、ろう教育、ろう文化に興味があります。特にスウェーデンでは福祉が発達していると聞きました。どんな教育が行われているのか、ろう文化はどのように受け継がれたのか、どうやって手話が言語として認められたのか勉強したいとずっと思っておりまして。そんなとき、北欧の話聞き、是非、参加したいと強く思いました。筑波技術短期大学の学生ではないのですが、私も参加できますか？詳しい話を聞かせてくださいませ。

2.2 訪問先について

訪問先は、4カ国の首都、ヘルシンキ(フィンランド)・ストックホルム(スウェーデン)・オスロ(ノルウェー)・コペンハーゲン(デンマーク)にあるろう者に関連する機関や施設であり、見学・研修とそこでの交流を行った。以下に、都市別に記述する。

2.2.1 ヘルシンキでの研修と交流

ヘルシンキ(フィンランド)は、市民社会の中で、ろう者の活動が非常に古くから行われてきた都市であり、フィンランド共和国の憲法には、「手話がろう児・ろう者の言語である」ことが明記されている。そのため、手話通訳者の養成や派遣のシステムがしっかりしている。通訳者派遣のための年間予算は、2003年度で1億3000万円以上あり、生活関連の通訳依頼は年間約9000件であったという。教育現場に対する通訳者の養成や派遣のシステムは、求められる専門性が違うため別の組織で運営されている。

ヘルシンキでの研修と交流は、ライトハウス、ろう学校、デフハウスで行った。

【Light House】

ヘルシンキにあるライトハウスには、フィンランドろうあ連盟、ヘルシンキのデフクラブ、フィンランド難聴者協会、ろう児や難聴児をもつ親の会、さらに、手話教育及びろう者や盲聾者とのコミュニケーションのための通訳者養成機関と世界ろうあ連盟本部の事務局などの諸団体・機関が居を構えて活動をしている。ライトハウスの経営は、国営のスロットマシン協会とフィンランドろうあ連盟、ヨーロッパ各国の管理連合などによる共同出資形式で行われているが、フィンランド側が50%以上を負担しているとのことである。我々はここで、フィンランドろうあ連盟と世界ろうあ連盟の活動についての説明を受けた。



写真1: 世界ろうあ連盟事務局長

【Albert School】

聴者の小・中学校の中に併設されているろう学校である。5つのクラスでろう児が手話での授業を受け、2つのクラスで難聴児が音声と手話の併用で授業を受けている。また、別の1つのクラスで重複児童が授業を受けている。我々のグループは、3つに分かれてそれぞれに特徴的なクラスの授業を見学した。どのクラスも複数教員が授業を進めていた。個別の指導を行っているクラス、グループに分けて指導を行っているクラスというように児童・生徒の状況に合わせて小回りのきく授業展開を行っているようであった。子どもたちの反応はとても明るく、元気であった。日本からのちょっと大きなろう・難聴学生に話しかけられても物怖じしないでコミュニケーションを返していた。授業が終わってからの休み時間には、少し雪の舞っている校庭に出て来て元気に遊んでいた。そこでは、我々と一緒に写真を撮ったりしながら、身振りを交えたコミュニケーションの成立が可能であった。また、ろう学校の教員とも、ASL（アメリカ手話）を介して、お互いの国の手話の紹介や簡単なやり取りを行った。時間切れでバスに乗り込む我々を、多くの子どもたちが別れを惜しむように手を振りながら見送ってくれたのが印象的であった。



写真2: Albert School のろう児との交流

【Deaf House】

ヘルシンキのろうあ協会が運営するデフクラブは、1895年に設立され約110年の歴史を持つ。老若男女のろう者が集い、様々な会合を行うことができる。現在のメンバーは、約380名。ここを利用するろう者は、趣味やスポーツを行うために様々なクラブを立ち上げて活動をしている。また、研修会を開いて学びあうことも行っている。このようにろう者が運営するデフクラブは、フィンランド国内で大小あわせて43もある。初老の会長の説明は、ろう者の活動をイメージ豊かに我々に伝えてくれた。

夜は、我々との交流のために、昼間会ったろう者や大学

で教員を目指しているろう学生や働いている若いろう者、さらには手話通訳者も個人参加で集まってくれた。そこではお互いの手話の違いを超えて和やかな交流が行われた。



写真3: ヘルシンキのデフハウス前で

2.2.2 ストックホルムでの研修と交流

スウェーデンは、「手話がろう児・ろう者の言語である」ことを国会で決議し、ろう児の学習環境やろう者の生活環境の整備を進めている国である。それは、聞こえる子どもにとって音声言語が、人間の自然言語として機能しているように、聞こえない子どもにとっては、手話言語が自然言語として機能することを、国として認めているからである。

例えば、聞こえない子どもが生まれた場合、その家族すべてが手話の研修を無料で受けられるのみならず、聞こえない子どもが関わるであろう人々に手話を学ぶ機会が与えられる。もし、手話の研修のために親が会社を休む場合は、会社へ国がその給料を補償することにもなっている。

我々は、首都であるストックホルムにある諸機関を訪れ、研修と交流を行った。

【スウェーデンろうあ連盟】



写真4: スウェーデンろうあ連盟での研修

スウェーデンろうあ連盟は、世界ろうあ連盟へ強い関わりを持ち、組織力もあり、とても力強い活動がなされている。手話教育やろう者への教育を推し進めるための活動は、特に力を入れていることのひとつである。連盟長の話では、日本ろうあ連盟とは非常に仲の良い関係を作り上げているとのことであった。話の時々、日本の手話も取り入れながら話しているその姿は、そのことの証でもあった。

連盟の事務所内には、ろうあ連盟で作売り出している手話入りのTシャツなどが展示してあり、学生達が自分や友人へのお土産として何着も購入していた。国家からも資金を得ているが、ろうあ連盟自身もいろいろな活動を通して収入を得ている姿勢が印象的であった。

【マニラろう学校】



写真5：マニラろう学校で（質問する学生とブリンツ副校長）

マニラろう学校では、ろう者と聴者の教員が大体同じ人数おり、そのコミュニケーション手段は手話である。手話のできない教員が採用されるときは、教員への手話の講習を行う。授業は、聴者の学校と同じ内容を同じ進度で行っている。マニラろう学校の歴史についての説明を、ろう学校の若いう教員がASL（アメリカ手話）とジェスチャーを使って行った。また、日本からの学生達へ、どのような勉強が好きかといった質問があり、自己紹介を兼ねて一人一人が話をした。

日本の学生達からは、「聴者の学校へ通っているろう児や難聴児がいるのか」「マニラろう学校は他のところの聞こえない人たちにも支援をしているのか」「ろう学校を卒業した後の職業はどんなものがあるのか」「ろう学校で学ぶろう児と聴者の学校で学ぶろう児との間に学力の差があるか」など、許される時間をぎりぎりまで使って我々グループの学生からの質問が続いた。手話と音声言語の通訳を通しての時間がかかるやり取りではあったが、副校長とろう教員は真摯に質問に答えてくれた。手話で教育を行うスウ

エーデンのろう学校の徹底ぶりがより鮮明になったことは、質問した学生達にとっても大きな収穫であった。

【ろう者番組作成テレビ局】



写真6：ストックホルムのろう者テレビ局

ビデオテープに映像を収めて、デフクラブやろう学校に配信するというろう者のための事業が始まったのは、1975年である、という説明を我々が受けたのは、現在、スウェーデン国営放送のろう者番組作成・放送局で働いているろうスタッフからである。スウェーデンでは、現在、国営の放送番組として、ろう者向けの専用番組を設けており、ろう者はもちろんのこと、国民の誰もが見ることができるよう毎週1回、1時間の番組が放送されている。

狭い部屋で、二人のスタッフからのASL（アメリカ手話）と表現豊かな身振りを使っての分かりやすい説明に、皆、楽しそうに見入っていた。夜は、テレビ局のろう者スタッフと夕食会を設定、撮影現場の裏話や日本の紹介などで話が尽きることはなかった。

【高齢者サービスハウス】



写真7：高齢者サービスハウスを訪問

ストックホルムの街の環境も利便性も良い場所に建っている。1985年に建てられ、現在112の高齢者世帯が住んで

いる。内、ろう者は11名。90歳を過ぎて1人でも生活が可能のようにサービス体制が調えられている。手話ができる介護職員（介護士資格を持つ）も2名いる。手話のできない職員に対しては、口話をうまく使って対応している。入居するためには、申し出を受けて審査官によるチェックを受ける必要がある。ろう者のためだけの老人ホームを新たに造ろうという動きも今始まっているとのことである。

福祉サービスに興味をもつ学生も多く参加していたため、非常に熱心な質疑応答が行われた。必死になってメモをとっている学生達が多かったことも関心の高さを示していた。丁寧な説明を受けた後、二つのグループに分かれて、90歳を超えるろうの老人の部屋などをとともオープンに見学させてもらった。その豊かな生活スタイルとセンター内の環境の良さには、ここを訪れた我々すべてが感嘆の声を上げていた。

【ストックホルム大学】



写真8：ストックホルム大学

その建物のスタイルが特徴的なストックホルム大学では、手話言語学、手話教授学、手話の教育方法学などの研究と教育が行われている。ろう者の教員が2名で、大学での手話に関するカリキュラムの説明を行った。その中の一人は、世界で初めて、手話での博士論文を完成させたろう者であった。その国の音声言語を使って手話言語学を学び研究するところは他の国にもあるが、手話言語そのもので論文を作りそれへの評価を受けて博士号を取れるのは、世界の中で、このストックホルム大学だけであるという。その点では、手話を自らの言語にしているろう者にとっては、とても羨ましい高等教育・研究機関であり、スウェーデンという国の手話に対する認識の高さを示しているとも言える。

2時間近くの説明の中には、手話言語学という、日本から行った学生にとっては普段あまり考えたことのない講義内容も含まれていたが、学生達からの質問の手は止まることなくなかった。

【Deaf House】



写真9：ストックホルムのデフハウスでの再会

スウェーデンの主要な都市にあるデフハウスの中でも一番大きいのが、ストックホルムのデフハウス。ここで、我々は感動的な再会を実現することができた。2年前（2002年3月）の北欧交流・研修旅行で訪れたスウェーデンのレクサンドにあるヴェスタンヴィク国民高等学校で交流をしたろう者の何人かと再会したのである。彼らは当時、スウェーデン社会で働くために、年金をもらいながらの勉強中であった。そして今回、就職して働き、スウェーデン社会で税金を納める立場に変わった彼らと再会したのである。残念ながら、一度就職したがうまく行かず再就職先を探している者もいたが、多くの者は働き続けているとのことであった。デフハウスで顔を合わせるや否や、お互いに2年間のご無沙汰を越えてコミュニケーションし合った。

この場所で我々は非常に多くのろう者と交流ができた。そして、その様子を後日放送する予定で、スウェーデン国営放送局のデフスタジオのスタッフが、取材のためにカメラを回していたことが印象深かった。

2.2.3 オスロでの研修と交流

北欧への交流プログラムとしてノルウェーを訪れるのは初めてであった。バイリンガル教育や手話に対する取り組みなどが、北欧諸国との連携のもとで進められている国である。もちろん、「手話がろう児・ろう者の言語である」ことを実践の中では生かそうとしているが、北欧諸国の中で「手話」や「ろう文化」や「ろう教育」の面では、後塵を拝している感が否めない国でもある。しかし、実際に訪れたデフハウスや教会での交流を通して、決して見劣りしないろう者のアイデンティティと力強さを見取ることができた。我々は、短い時間ではあったが首都であるオスロの諸機関を訪れ、交流と研修を行った。

【オスロ大学】



写真 10：オスロ大学で手話通訳養成コースの学生と共に

オスロ大学には、ろうの学生は数人程度しかおらず、ほとんどが聴者の学生である。教育学部には手話通訳者の養成コースがあり、多くの学生が学んでいる。その学生達も同席しての質疑応答を行った。日本の手話通訳環境の現状を説明すると、オスロ大学の学生達は顔を見合わせて、少し暗い表情をしていた。オスロ大学では、ろう者の教員が聴者の学生達に手話を教えており、プロの手話通訳者として育とうとしている学生達の目は真剣そのものだった。その学生達は、日本のことについての質問を前もっていくつも準備していたのだが、一つ一つの説明に時間がかかり、やり取りできる時間内にはそのすべてを聞くことができなかった。

また、同席していた手話の文法を教えているという聴者の教員は、手話をあまり使えないということで、自分の話しに対する質問の受け答えの時に、時々居心地の悪そうな表情をしていた。似たようなことは日本でもよくあることだが、「手話を身につけずに手話を教える」「手話を身につけずにろう者に教える」ことの矛盾がそこにあると考えざるを得ない。

【ノルウェーろうあ連盟】



写真 11：ノルウェーろうあ連盟（オスロ）

ヘルシンキやストックホルムのろうあ連盟本部と比べるとだいぶ質素であった。説明を受けた部屋は、我々のグループ29名がとても入りきれない広さであった。我々に対応

したろうあ連盟の職員は難聴者らしく、比較的きれいで大きな発音と対応手話を使って説明した。ろうあ連盟の活動をより活発化させようとの熱意が伝わる説明ではあった。我々は、日本へのお土産にと、立派なノルウェーの指文字表、若者に多く使われているイギリス系のものと年配者に多く使われている伝統的なものを、いただいて連盟事務所を後にした。

【Deaf Church】



写真 12：ろう者の集まる教会にて

オスロ郊外にあるろう者が集まる教会へは、日曜の朝、訪れた。建物の外も中も煉瓦造りで魅力的に作られていたが、ミサが始まって驚いた。そこでは、音楽こそオルガンの音が響いているが、始めから終わりまですべてが手話で進んでいく。聴者の牧師も手話で話を進める。時々声も出すが、必ず手話がある。その美しさを感じさせる光景は、手話が教会の活動を通して広がりを見せた歴史的事実に、説得力を与えるようであった。天井からはスクリーンが降りており、パソコンから聖書の物語が分かりやすく映し出されていく。集まっている人々は、中年以降の婦人が多数、もちろん皆ろう者である。若者が少なかったのは、ちょうどこの日にウィンタースポーツの大会があり、若者達がそちらの方へ出かけてしまったからとのことであった。

ミサが終わって隣の広間で交流を行った。おいしい手作りのケーキと飲み物が用意されており、温かく迎えてもらえたうれしさを我々一同心に刻んだ。ただ、オスロでも失業率は高いようで、その場に居合わせた一人の青年ろう者が、現在失業中で職を探しているということを、あまり笑顔を見せずに話していた。また、日本からオスロまで来るのにかかる旅費の質問に我々が正直に答えた後、その高い旅費にびっくりしていた顔が忘れられない。それが、福祉が進んでいることと貯蓄が少ないことの実情なのだろう。

【Deaf House】



写真 13：デフハウスで盲ろう者と話す

オスロにあるデフハウスでは、毎週一回ろう者がテーマを決めて集まり、議論をするという日（夜）がある。我々はちょうどその日に訪れることができた。その日は、「ろう者と人工内耳」がテーマになっていた。一人の老人が、自らの体験、人工内耳の手術を受けたこととそのことに関する考え方を話題提供して、集まったろう者と議論をするというものであった。ノルウェーの手話を読み取れない我々は、通訳を通して話の概要を理解した。しかし、「人工内耳」というテーマを、ろう者同士が堂々と議論するこの日の様子は、日本でもこのようなことが行われているだろうかという疑問を我々に抱かせると共に、ここに集まったオスロのろう者の力強さを十分に感じさせるものであった。

集会が終わってから、内部の見学と何人かのろう者との交流をしたが、その中に初老の盲ろう者もあり、そのろう者とは触手話を使って簡単なコミュニケーションを行うこともできた。

2.2.4 コペンハーゲンでの研修と交流

デンマークは、「手話がろう児・ろう者の言語である」ことを文部科学省にあたるところからの通達によって、ろう児の学習環境やろう者の生活環境の整備を進めている国である。スウェーデンより統合教育の傾向が強い国ではあるが、手話の研修や教育に関しては、多くの予算と人材を養成している。

今回我々は、首都であるコペンハーゲンにある研究所、ろう学校、デフハウスを訪れ、研修と交流を行った。

【カステルスバイ（Kastelsvej）ろう学校】

バイリンガル教育の成果を世界に広めたろう学校である。当時の教員には会えなかったが、デンマーク手話が堪能な校長の話の中に、その成果が受け継がれていることを見て取れた。しかし、現在のろう学校の悩みは、バイリンガル教育とは別のところにあるようであった。それは、いろいろな国から集まっている生徒達への対応であり、重複児童

へのそれである。国際的な多様化は、宗教・価値観の問題を表面化させる。そのため、ろう学校として、非常に神経質に対応せざるを得ない状況があるようだ。バイリンガル教育の実践においては揺るがないものを持っているにもかかわらず、話をする校長の表情はそれほど明るいものではなかった。帰り際、窓越しに、教室にいたろう児が出した「日本はいいね。デンマークは良くない」という表現に、子どもの単なる社交辞令とも受け取れない重さを感じたのも事実である。



写真 14：デンマーク手話の堪能な校長

【KC（コミュニケーションセンター）】



写真 15：KC内の壁掛けから

カステルスバイろう学校の隣に位置する KC（コミュニケーションセンター）は、デンマークの手話教育を担っている教育・研修機関である。ここでの説明で一番強調されていたことは、人工内耳の増加のことである。人工内耳の増加で、手話の研修に訪れる親や家族の減少があるという。無料で手話を学ぶことが準備されているにもかかわらず、聴者の親は人工内耳という聴力補助装置に頼ってしまう姿が見えてくる。しかし、話の中でも出ていたが、この減少は一時的なものだと思うというのが、この副所長の見解であった。ろう児やろう者にとって、手話の持っている意味・価値に必ずまた気づくはずだというのである。

我々は、ここでの昼食と説明の後、所内の見学を行い、

ちょうど行われていた手話通訳者養成の授業も見学して、日本の手話の紹介を兼ねた交流を行った。

【Deaf House】



写真 16：歴史あるデフハウスでの研修

コペンハーゲンにあるデフハウスは、約 140 年の歴史を持ち、その活動も多岐にわたっている。ろう者運動という面だけではなく、文化的活動、教育的活動、社会生活に必要なあらゆる活動に関わりを持っている。その中でも特に力を入れて活動しているものの一つに、手話通訳者派遣業務がある。力を入れている理由の一つは、派遣事業がろうあ教会の収入源になるからという。今回訪れたデフハウスの中で、最もはっきりと派遣事業について説明してくれたのが、ここであった。

研修後、一階にある談話室でろう者との交流も行った。我々は、ここでも、交流を通して、ろう者がこのようなデフハウスを非常に大切に利用していることを教えられたのである。

3．交流プログラムを終えて

今回の北欧交流・研修プログラムは、本学学生のみならず、他大学で学ぶろう学生や難聴学生、さらには社会人として働いているろう者や難聴者にも呼びかけを行い、実行した。最後にそのことの意味を確認するために、「行く前と今とではどの様な心の変化がありましたか」という問いに対する参加者の文章を紹介しておく。

自分の住む地域の為にろう教師になりたいと思った。(他大学生)

最初は単に「北欧の福祉を見る」という感じで臨みただけ、終わってみれば、ろう者としての生き方について得られるものが多くて良い旅行になったと思います。(他大学生)

不安だらけだったけど、「自立」という精神を大事にした旅行だなと思った。これで成長少しはできたかな？この経験を、将来活かしたいです。(本学学生)

行く前は気軽な気持ちだったが、今はこれから自分がすべきことを考えさせられた。今、考え中です。(本学学生)

いろいろなるろう者との関わり(この旅行のメンバーもデフハウスで出会った人も含めて)、ろう学校・ろうあ連盟での視察も含めて、分かっていたつもりなのが、ものすごく瞬時だったことに気づけた。崩れたものを日本に持ち帰って、さらに追求したい。研究に対するモチベーションをこの旅行で作れた気がする。(他大学生)

「ろう」について何も調べないまま、参加したことに後悔した。思ったよりハードですごく疲れた。(本学学生)

以上は、いろいろ書いてもらったことの一部ではある。しかし、この一部を見ても、今回のような交流・研修プログラムが、極めて有意義な教育プログラムとして機能していることを読むことができる。また、ろうや難聴の学生集団を教育対象にしている本学だからこそ可能であるプログラムということも同時に言える。さらにまた、手話通訳者として参加して頂いた方からも、厳しかったけれどもも有意義な国際交流であったとの評価を受けている。

4．おわりに

本プログラムに参加した学生達は、帰国後それぞれの生活に戻った。その中の一人からは、改めて福祉の仕事を目指す意義が見えてきたとのメールをもらった。もちろん、このような旅行一つで何もかも変わるものではないが、参加した学生達が、自分の目標の再確認や新たな目標を作り出すことに関われたと思える言葉をもらえることはとてもありがたいことである。今回参加した人たちの意見や感想を、次にも行われるであろう交流プログラムに役立てるものとすることを確認しておきたい。

最後に、本交流プログラムは、学長裁量経費による学内プロジェクト「学生・教職員の国際交流・研修プログラムをともなう、欧米、アジア・太平洋地域の、聴覚・視覚障害者高等教育の比較研究」の一環としておこなわれたことを記してこの稿を終わる。

参考文献

- [1] 新井孝昭、萩田秋雄、他：スウェーデン・デンマーク・フィンランドへの交流・研修プログラムの実践報告 - 北欧の聴覚障害者高等教育と手話環境 - . 筑波技術短期大学テクノレポート 11(1)：75-83, 2004 .

**Report of Associative and Educational Programs in Nordic Countries
— For Deaf and Hard of Hearing Students —**

ARAI Takaaki¹⁾ NISHIOKA Tomoyuki¹⁾ YAMAWAKI Hiroki²⁾ HAGITA Akio²⁾

¹⁾ Department of Information Science and Electronics-Information Science Course, Tsukuba College of Technology

²⁾ Department of Architectural Engineering, Tsukuba College of Technology

Abstract : We participated in educational programs for deaf and hard of hearing students in Nordic countries (Finland, Sweden, Norway, Denmark) in March, 2004. People from other universities also attended. Their attendance was the result of the action of students of Tsukuba College of Technology (TCT) who had attended previous programs.

In this program, we visited various post-secondary educational institutes, some agencies related with deaf people, and made cultural exchanges with local deaf groups and societies related with deaf people and hearing people. In the process, other exchanges between students of TCT and other universities or working persons who are deaf or hard of hearing, was held and is still continuing. In this paper, we report on the proceedings and the result of our programs.

Key Words : Deaf education, International association program, Nordic inspection